武田泰淳全集

別巻二

筑摩書房

武田泰淳全集　別巻二
昭和五十四年十月二十日　増補版第一刷発行

著者　武田泰淳
発行者　関根栄郷
発行所　東京都千代田区神田小川町二ノ八
株式会社　筑摩書房
郵便番号　一〇一―九一
電話　東京(291)七六五一(営業)
東京(294)六七一一(編集)
振替　東京　六―四一二三
印刷　株式会社　三松堂
製本　和田製本工業株式会社

Printed in Japan　0395―72420―4604

別巻二　目　次

同文同種というけれど……陳舜臣／武田泰淳　3
日本の政治家は外交ができぬ……尾崎秀樹／武田泰淳　17
大学はなぜ必要なのか……柴田翔／武田泰淳　30
文学と狂気……北杜夫／武田泰淳　58
朝鮮のこころ日本のことば……李恢成／武田泰淳　76
『十二年の手紙』のころ……宮本顕治／武田泰淳　89
国際ロマン派の若者たち……五木寛之／武田泰淳　102
「殺す」こと・「殺される」こと……寺田透／武田泰淳　112
戦後・仏教・愛……大岡昇平／武田泰淳　136
精神の共和国は可能か……辻邦生／武田泰淳　161
生きることの地獄と極楽……真継伸彦／武田泰淳　184
文学と宗教と人生……加藤周一／武田泰淳　200

亡命者の運命……開高健／武田泰淳 212
戦争と中国と文学と……竹内実／武田泰淳 222
新しい価値観を求めて……桑原武夫／武田泰淳 230
「中国文学」のころ……竹内好／武田泰淳 236
混沌から創造へ……開高健／佐々木基一／武田泰淳 259
元気の出る小説……古井由吉／武田泰淳 374
対談者略歴……399
解題……407

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

対談2

同文同種というけれど

陳　舜臣
武田泰淳

武田　「諸君！」（四十五年十二月号）に、陳さんがお書きになった『同文同種こそ誤解のもと』というエッセイ。あれは大変に興味深かった。日中両国は同文同種と軽々しくいわれているけれど、そもそも同文同種という言葉が誤解されている。だから、同文同種であるというようないい加減な考え方を反省して、そこを出発点にしなければいけない、というような論旨でしたね。

陳　同文同種、同じ文字を使っているということは、筆談ができて互いに便利には違いありませんが、その反面、なんでもわかっているような気になってしまうんですね。それが実はよくないんで、なにも知らないんだという、お互いに白紙の状態から始めなければいけないと思うんです。同文、というより正確には、同じ文字を使っていることが災いする場合が非常に多いわけですからね。同じ文字といっても、ニュアンスが両国でそれぞれ違うわけでしょう。

同じ日本でも、関東と関西では違っているくらいですからね。能なしについていうとき、アホウとバカと、関東と関西では逆のとらえかたをしています。江戸ッ子はバカヤロウといつも合の手のように使っているから、バカといわれても腹が立たないけれど、アホウといわれると、白痴といわれた感じがして腹を立てる。関西では逆に、「アホな話」とか「そんなアホなこと」とか、しょっちゅう使っているんで、アホウといわれてもなんともない。その代り、バカヤロウといわれると、馬と鹿で犬畜生あつかいしたと思ってしまう。（笑）いまは関東と関西の交流が、テレビやラジオを通じて盛んになってきましたから、昔ほど言葉のニュアンスの差がなくなってきつつある。

これをもうちょっとエスカレートしたのが、日本と中国との関係だと思うんです。

武田　そうですね。

同文同種の真の意味

陳　つきあう場合でも、ちょっとした習慣の違いでイヤな思いをすることがあるかもしれない。でも、これは似ていると思うからイヤな感じがするわけで、ああこの人は全然別だな、習慣が違っているのだなと思えば、相手を許すことができますね。たとえば、箸の上げ下ろしが気に食わんといって怒ったりするのは、本当はこういうふうでなければいけないのに、相手がしなかったという観念があるからでしょう。それを初めから、相手はなにも知らないんだと考えてしまえば、腹も立たない。むしろ愛敬になりますね。そんなふうな関係に、日中を持っていくべきだ、と私は考えます。

武田　陳さんは、同文同種という言葉は熟していない新造語であって、本当は同文同軌であるとおっしゃっていますね。軌とは車両のはば、轍のことでしょう。

陳　ええ。春秋戦国時代、よその戦車が入ってこないように、故意に各国で轍の広さを変えていたんです。そうすると、自分の国の戦車は通れても他国の戦車は入れない。だから、轍の広さを同じくするというのが……。

武田　平和状態をあらわす。

陳　そうなんです。同種の種は、黄色人種を指すのでしょうが、ずいぶん生臭い感じがします。

武田　たしかに生臭いやね。

陳　同文にはうなずけますが、同種といわれると、そのウラになにかあるんじゃないかという感じがしてしまう。同文同軌ということになると、お互いの車を通じあう、侵略の用意がないということの証明になりますから、語としては穏当という気がするんです。

武田　昔は道路が舗装されていないわけで、ことに黄土地帯は一回雨が降って、そこを車が通ると、あとがカチンカチンに乾いて、ほかの轍は通れない。だから、轍が同じかどうかは、大変な問題なんだな。

陳　秦の始皇帝は天下を統一すると、轍を同じにしましたね。それが天下統一のシンボルです。戦車といっても、四頭立ての駟（し）の曳く車に、三人の武装兵が乗っているだけのものですが。

武田　それと、文字とハカリとマスですね。

陳　だから、同文というのは、同軌と同様に、諸国間の紛争がなくなった平和状態を意味するわけなんです。けっして、同じ文字を使う、という意味ばかりではない。清朝末期に、外交官養成のために外国語を教える学校を『同文館』と名づけたのも、そういう意味があるんですね。

武田　文字が自然発生的に同じというのではなくて、もっ

と人工的な意味があるわけでしょうね。それをわからなくてはいけない。

陳　まあ、同文同種というスローガンにあまり寄りかかっていてはいけないと思います。

「焼き殺す」ということ

武田　日中でニュアンスが違う実例として、文革の最中の言葉に「焼き殺す」というのがある。

陳　「殺す」という言葉は、物の状態を象徴する非常にわかりやすい言葉なんです。「愁殺」とか「笑殺」とか、白楽天（七七二～八四六）がよく使っていますね。彼は民衆詩人といわれているだけあって、わかりやすい言葉を使っているんです。「笑殺する」というのは、笑って殺すのではなくて、非常におかしいという……。

武田　程度をあらわす。

陳　日本でも「殺」を使う言葉がいくつかあるでしょう。「忙殺」。「黙殺」。「悩殺」。これには血の臭いがありません。悩殺には、むしろ白粉の臭いがする。（笑）

武田　そう。「悩殺」には、なまめかしいセックス・アッピールがある。むしろ悩殺されることは喜ばしいことであって、殺でも悩ならばいいということですね。ぼくは『才子佳人』という小説を書いたとき、「悩殺」でなく「懊悩殺」という言葉を使いましたよ。悩殺よりも、もっと悩ましいわけですね。（笑）悩殺の上に懊という字がついているんですから。そういう言葉が向こうにはある。

陳　台湾では、ぼくら「死」という言葉をよく使いますよ。非常に腹立たしいときには「気死人（キイシンラン）」とか……。

武田　「笑死了（シヤオスーラ）」。これはおかしくてたまらないという意味。

陳　笑わせるなという反語になりますね。そういうふうに、日常会話で殺すとか死ぬとかいう言葉を手軽に使う。ところが日本では、「殺」や「死」に、生命を奪うというもとの意味が濃く残っているんですね。

武田　そのことで、文革のとき笑い話があったな。「焚殺（ふんさつ）」というのは「あぶり出す」ことであって、むしろ「批判」よりも意味が弱いのに、これが日本人にはわからないものだから、向こうに行った日本人が「あんたがたの言葉の使い方はひどい」といったら、向こうの人は「日本だって、ストライキをやると首を切るじゃないか」（笑）

　そういわれてみると、自分たちの言葉は無神経で、たとえば、「作家をホテルに罐詰にする」なんていうのを向こうの人が聞いたらどう思うか。（笑）ある雑誌社が作家を罐詰にするというのは、雑誌社も作家も栄えている状態であって、われわれからいえば、むしろ罐詰にされたいわけですよ。それを向こうの人は、なぜ罐詰にされたいのか、

と、残酷物語のように思う。

陳　そういう例がたくさんあれば気をつけるんですが、少ないから見落とすんです。大もとの意味が同じで、ニュアンスの違いだけですからね。だから見過して、それが積み重なるという危険がある。

武田　その通りです。それから、日本じゃアメリカを米の国と書きます、メリケン粉の国なのにね。（笑）中国では美国でしょう。ドイツは徳国。日本じゃ孤立の国、独国ですね。アメリカは美しい国であり、ドイツは徳の国であって、向こうの方が相手に失礼のないように、神経使って訳してますね。日本はどうしてアメリカを米の国と書いたのか、ちょっと神経わかりません。いまとなったら、美しい国と書けばよかった。（笑）

陳　ポルトガルのことをフランキーといいますね。あれはアラビア人が十字軍のキリスト教徒をフランキーと呼んだのが語源なんです。仏郎機と書くわけですが、ポルトガル人がマカオで暴れたときは仏狼機と書く。（笑）阿片戦争（一八四〇～四二。アヘン禁輸を契機とする、清英間の戦争。その結果清国は開国を強要され、半植民地化の道をたどることとなる）のとき、英吉利と本来は書くところをケモノを表わす口偏をつけて、啖咭唎と書いていますね。

武田　日本も戦争中に米英にケモノ偏をつけたことがあったな。それからね、ローマ字を漢字に直すと、まったく感じが違うことがありますね。ターザンってジャングルの中で暴れる人、あれは中国では……。

陳　泰山、泰平の泰です。（笑）

日本人の想像力

武田　ユーモアは中国語では「幽黙」ですね。これは実にうまい訳だな。幽霊が黙るなんて、ユーモアの本質をついているでしょう。この字ができたのは、割合に新しいんです。国民党政府の統制が厳重になってきて、文士たちの、共産党の人は別として、普通の文士たちの抵抗運動ができなくなった。そのとき、幽黙という訳ができたんです。

陳　そうですね。阿片戦争のとき、イギリスの兵隊を「洋鬼（ヤンクエイ）」といった。日本兵は「東洋鬼（トンヤンクエイ）」です。日本でいう東洋は、アジア全体を指すでしょう。だが中国からいえば、東洋とは東の海の向こう、つまり日本のことです。東洋というとスケールが大きいみたいだが、そう思うのは間違いなんです。それから、鬼だって、中国語の鬼は幽霊、亡者のことでしょう。鬼といわれると、鬼軍曹とか鬼将軍とか、自分が強いことをたたえられていると、内心じゃ喜ぶのと違いますか。（笑）向こうでは、鬼というと、冥途の、不吉なという感じが先に来るんですがね。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

武田　そういう違いを、日本人はよく知らないんだ。

陳　こういうこともあります。中国人は、事実と違うことには文句をつけるんです。張継（八世紀、湖北の詩人）の『楓橋夜泊』にある「夜半ノ鐘声客船ニ至ル」という文章について、欧陽修（十一世紀、北宋の学者）は「お寺の鐘は夜半には鳴らない」と文句をつけている。詩としてはいいが、これは違うと。これはやはり論語にある「述べて作らず」の罪ですね。作りごとをしちゃいけないとなると、想像力が折られてしまいます。なにをするにも想像力は必要なのにね。これが官僚政治とならんで中国を停滞させる大きな原因となっていると思うんですよ。儒教が中国にのこした大罪のベスト・スリーに入るんじゃないかな、「述べて作らず」は。（笑）

ぼくはいつもいうんですが、その反対が日本の『愛国行進曲』ですね。〈見ヨ東海ノ空明ケテ、旭日高ク輝ケバ……の旭日は、高く輝くものではないですね、本当は。地平線から出てくるとか、山の尾根から上ってくるのが旭日ですから。（笑）それを、日本の人は誰も文句いわない。これが中国だったら「お昼の太陽と違うかあ」って文句がくる。（笑）

そういう考証を中国人は一所懸命にやるんです。もっとも、日本人の想像力では、旭日というのは勇ましいもの、勇ましいことと高いこととは抵触しないんですね。新鮮な太陽が、高く、想像力の線の中に入ってしまっている。

まあ、それほど違いがあるわけだから、とにかく同文を頼りにすることはやめようじゃないかと……。

武田　つまり、接触した場合に新鮮な感覚を持つ、そういうやりかたをした方がいいんじゃないか、ということでしょう。

陳　ええ。相手にこんなところがあったのかという驚きの念を持った接触の仕方をしたいですね。なんか、いまは澱のようなものがたまって、フレッシュじゃない。

武田　同文同種、同じ言葉が両方で使われているならばいいけれど、おっしゃるように両方変ってきてますからね。今の中国は自分のワイフを「愛人」というでしょう。あれは突然変異ですね。日本人も恥ずかしがって「愚妻」といったように、昔の中国人は「荆妻」とか「太太」とかいった。スンナリした奥さんでも、太いという字を二つも書いた。（笑）いまは平気で愛人でしょう。そのくらい変化が起きているんだから。

陳　そうですね。

「歴史」を知らぬ日本人

武田　陳さんは以前、『阿片戦争』という三冊分の大作を、

非常にたくさんの文献を読まれてお書きになった。あの対英戦争での、洋鬼に対する態度と、日本が攻めこんでからの東洋鬼に対する態度には、どこか違いがあるのではないでしょうか。同じ侵略者に対抗するといっても……。

陳　意識の違いはありますね。阿片戦争の時は、北京にいれば辺境のチベットあたりで戦争をしているような感覚だったでしょう、南の方でゴソゴソやってるなという具合で。イギリス艦隊が天津あたりに現われると慌てて、広東に移ると強がったりしています。その時分はコミュニケーションの手段があまりないですから、全国をふるい立たせるというわけにはいかなかった。

武田　奥まで攻めこまれるという恐怖感はなかったでしょうね。

陳　なかった。はじめからタカをくくっていた感じですね。

武田　あの戦争が英雄的に宣伝されたのは、対日戦争に対する意識を高めようとする動きと同時期ですね。あの政治家、なんといいましたっけ。

陳　林則徐（一七八五～一八五〇。イギリスからの阿片輸入を厳禁した。没収した阿片を廃棄して、阿片戦争の発端となった）。

武田　そうそう、彼が国家的な英雄になったのは、日本が侵略をはじめてからのことでしょう。それまでは地方的な勇者だった。

ところで陳さんは「太平天国」（一八五〇年、大飢饉にあえぐ民衆が立ち上り、独立国の太平天国を作り、約十六年清朝と争った）について、小説をお書きになるご予定だそうですが、阿片戦争の十年後に起こった太平天国の場合、指導者の洪秀全（一八一四～六四）はキリスト教徒で、つまり、最初は排外主義ではなくて、むしろ「人間皆兄弟」というテーゼを持っていた。

陳　そうですね。最初のころに集まった連中が疎外された人たちでしょう。客家（ハッカ）（土着の人に対する新来人という蔑称）で、ふだんから、なんとなく地元の人から圧迫されていましたから。

武田　客家、つまり地元の人じゃないというわけで……。

陳　何百年前に来たのに、まだ新参者のように差別されていた。だから、四海皆兄弟という主張がでてきたわけですね。

武田　太平天国の次に起こった義和団（山東、河北の農民を主力に列強の中国侵略に対する一大抵抗運動が起こって、一九〇〇年に北京、天津で各国公使館を襲い包囲した。そのため日本、イギリス、ロシア、アメリカ、イタリア、フランス、オーストリア＝ハンガリー、ドイツ連合軍が北京に入城。義和団は鎮圧された。この事件で列国の軍隊常駐

が認められるようになった）の場合は、明らかに排外主義がありますからね。その前の太平天国はヒューマニズム。その前の阿片戦争は攘夷思想。これは面白いですね。つまり、同じ武力抵抗なり実力行使をやっても、その内容は変ってくるんだから。そうはいっても、ぼくらが見ると、そう簡単に歴史が動いているようには見えない。まあ、そういう暴動の中で一番成功しているのが、太平天国ではないですか。

陳　そうですね。

武田　南京を陥落させ、杭州を落とし、揚子江沿岸をずっと征服した。けれど、結局北京は落とせなかった。でも、かなり全国的な権力を一時獲得しましたね。まあ、いまの日本人は、阿片戦争、太平天国、義和団といっても、それがどういうふうに日本の歴史に関係しているのか、さっぱりわからないんじゃないか、あれはただ向こうで起こった事件であって、こっちには全然関係がない。いや、関係ないというより、そういう言葉すら知らないんじゃないですか。これは、日本人の因子と関係があるな。

陳　ありますね。

赤軍派に望む

武田　その反対に向こうの人は、歴史的にうまいことつなげて説明しないと、納得しない。たとえば、毛沢東の大長征がある。負け戦（対国民党軍）で、瑞金から延安の根拠地に入るまで、一万三千キロの行程の間にずいぶん人が死んでいますね。逃げていく道の途中に、太平天国の指導者の一人・石達開（一八三一～一八六三）の軍勢が全滅させられた地点（大渡河）がある。「太平天国の一番優秀な指導者が失敗した地点を、いま自分たちは越えていく。だからわれわれは石達開以上だ」。石達開についての記憶は、まだ残っていますからね。だから非常に効き目があった。こういうふうにいつでも歴史を利用してやっているわけですよ。

陳　石達開はあの辺を何万もの兵隊をひきつれてさまよい歩いて、いろんなエピソードを残した人ですからね。朱徳（人民解放軍の長老）も幼年時代に石達開の話をよくきいたと述懐しています。

武田　だから似てるんですよ、長征の軍隊の運命と。それで、石達開のほうは滅びたから、その轍を踏まないように注意した。いや注意したかどうかは知らないけれど、そういう前の失敗について、中国人はよく考えているんですね。

陳　そういう傾向はたしかにあります。

武田　日本でも明治維新のあと、小さな蜂起がたくさんありましたね。秩父事件（一八八四。埼玉県秩父郡で、借金

と重税に苦しんでいる農民が、自由民権主義者の指導で起こした暴動）とか加波山事件（同年。一部の自由党員が、茨城県加波山で起こした反政府運動）とか。それがみんな失敗している。本当に短い間に消滅していますね。だから日本でも、いまの赤軍派の人なんか、どこでどうやって失敗したかという歴史を知らないといけない。ただ意気盛んなだけじゃあね。ハイジャックぐらいじゃダメです。（笑）ぼくはべつに革命なんか望んでないけれど、もし望むんなら、もう少し歴史を詳しく調べなきゃ。

陳　でも、それが日本的な思考法じゃないでしょうか。

武田　花と散ってそれでいい……それじゃ、せっかく歴史を勉強しても、戦術とはつながらない。

陳　それが日本的な「もののあわれ」でしょう。本居宣長（一七三〇～一八〇一）は、「もののあわれとは、ものに触れてハッと出てくる嘆息なり」と言っていますね。しかし、嘆息は前にも後にもつながらない。（笑）商人が手形の期限を考えながら歩いていて、ひょっと桜の花を見てハッと嘆息をつく。それが「もののあわれ」ということになると、その前の、手形の期限とはなんの脈絡もない。嘆息をついてから、また歩き出して手形のことを考える。後にちょっと余韻が残るかもしれないけれど、いかにも日本的な、単発的な思考法です。

中国へのアプローチ

武田　話題を戻しますが、いまの中国は、アンチ・キリスト教的な体制を整えている傾向がありますね。だって、義和団をあれだけ英雄視すれば、義和団の相手、つまり海外勢力を代表する宣教師および中国のキリスト教徒を攻撃することになるでしょう。義和団の場合、アンチ・キリスト教のエネルギーが、革新勢力になった。ところが、太平天国の場合はキリスト教徒でも革命勢力になり得たわけで、それが面白いと思うんですが、いまの中国では、そのことを割合問題にしていませんね。でも、太平天国の指導者がキリスト教を信じていたということを是認しないとおかしいと思うんです。マルクス主義だって、キリスト教と同じく、西洋の教えであって東洋の教えではないわけでしょう。マルクスはドイツ人であり、レーニンはソビエト人なんですから。それで、いまの毛沢東になって、やっと中国人ということですからね。

陳　ただ太平天国のときのキリスト教といっても、洪秀全がはたして聖書を全部読んでいたかどうか疑わしいですね。広東あたりでパンフレットを読んだくらいかもしれない。『勧世良言』という題の簡単なものですよ。救世軍が道ばたでくばるやつ。

武田　その程度だと思います。

陳　共産主義のパンフレットを見て、興奮して共産主義者になるのと似ている。

武田　そうですね。たしかに『資本論』を読んでいる中国共産党員は、非常に少ないと思います。まあ『共産党宣言』ぐらいは幹部は読んでいるでしょうが、一般民衆は直接『毛語録』でしょう。その点で似ているんじゃないですか。

陳　洪秀全も、南京にいってから著作に専念していますね。人々に読ませようと思ったのでしょう。

武田　やはり太平天国と中華人民共和国を比較する必要があるな。陳さんに頑張っていただいて、太平天国を積極的に分析してもらわねばいけない。（笑）つまり、中国を知るには、いろんな近づき方があると思うんですが、中国を通じて中国を考えるといっても、簡単にはいかない。易姓革命とか、日本と違って万世一系ではないとか、簡単に考えがちでしょう。それはその通りなんですが、そういう大ざっぱなことではなく、もっと政治のダイナミックな動きを知らなくてはいけない。

日本人は漢文も読めるのに、そのわりには中国の歴史を読みませんね。それこそなんにも知らないで、中国のことをアレコレやっている。みんな同じ材料を使ってなんかやってるでしょう。全ジャーナリズムが同じ材料を使って、意見だけが違っている。（笑）そんなバカな話はないと思いますね。同じ材料で同じものをほじくって、敵味方になる。その敵味方が古臭いんだよね。その根底に古臭い要素を残してペンキを塗りかえしているだけでしょう。もうちょっと本格的にやってほしいですね。ボンヤリしていたければ、それだって構わないと思いますが、だけど何事かやろうとしている人になんにも手持ちの材料がないなんて、見ていてハラハラするね。ぼくは政治には関係ないし、どうなったって構わない。酒飲んで死んじまえばいいんだから構いませんけれど、（笑）そういうことをやりたがってる人がいかにも勉強しない。それでも平気なんだね。平気な顔をしてるんだね。あれ見てると、本当に心配になってくるんだな。

陳　いまおっしゃったことの原因は、日本人は岐路に立って、右に行くか左に行くか深刻に悩んだことがいままでなかったからじゃないですか。根本的な悩みを持たなかった国民だという気がします。

武田　たしかに恵まれた状態だった。

陳　人間はなぜ生きているのかという悩みを持ちはじめたころには、中国からもう文献が来ていましたでしょう。悩む前に、図書館にでも行って文献を見ればいい。自分で考

えるまでもありませんね。隣の中国から文献が来て、岐路に立ってもちゃんと道しるべがついているわけですよ。どうしようかと考えて文献を見ると、「右へ行け」と書いてある。だからその通りに行く。日本人は、手軽にそういう道しるべが得られた。そういう歴史的な環境が大いに作用していると思いますね。あんまり道しるべが多すぎて、岐路に立つとまた指標がある。その点では非常に恵まれていたんですけれど、それが反対に悲劇にもなっているわけじゃないでしょうか。

武田　そうですね。つまり、中国では農民暴動によって政権が転換して、後継者が立つ。しかし、農民暴動それ自身は必ず失敗するわけですね。暴動を利用した人が王朝を確立したわけですよ。中華人民共和国の場合、はじめて暴動と政権奪取とが一致した。これはいままでに例がないんですな。

それから、同文同種の問題で今後日本の文化人が考えなければならないのは、漢字の問題ですね。同文同種だ、お互いに漢字を使っているんだから大丈夫だというのはとんでもない間違いです。向こうは漢字をやめようとしているんだから。

陳　むずかしい問題ですね。長い論文が必要だな。

漢字の将来

武田　まあ、中国の場合、まだ国語が統一されてないから、国語の統一をまずしなければならない。いまはさかんに民族移動をやって、お互いに混合させて一つの中国を作ろうとしている最中でしょう。教科書も漢字のほかにローマ字も使っていますね。中国人は決して漢字にべんべんとしているわけではない。ところが日本の漢学者は、漢字がなくなったら支那文化はないという。しかし、日本の漢学者が持っている漢字に対する学識というものは、果してどの程度か。漢字が発生したときの事情を知らないで、それから流れ流れて末端になってきたわけでしょう。いまの漢字はずいぶん末端のものですね。その末端の漢字の意味だけを考えて、肝心のもとを考えないで、しかも漢字論者であるといっているのは滑稽ですね。

陳　なるほど。

武田　いまはもとの意味とまったく反対になっている漢字がたくさんありますね。たとえば、さっき話がでた「殺」という字は、もともと、タタリをする動物をうつ形で、ころすよりも、相手方の呪いの力を減らすのが原義です。平和の「和（カ）」は軍門のことで、それがいまの和になったのは、軍門の前で講和を結ぶからだという（白川静著『漢字―生

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook